

ふるさと

みのおのおいたち その9

# 箕面地区(五)

平安時代になると、地区の箕面・西小路・桜・牧落は、國の牧場になりました。延長五年(九二七)の「延喜式」に見えも右馬寮「豊満牧」で、郡に近く、天路の山陽道筋であることから、牧地に選ばれたのでしよう。御杖が建てられたとき、里に盛が

牧之荘絵図



振られ、山地には勝手を打った、と寛喜元年(一一三九)の古文書に見られます。故と他領を區別し、牧場から馬牛の逃げる

貞和五年(一一三九)ですが、後世の古文書に興味あることが書かれています。「寛永四年(一六二七)当時八平尾・西小

どころで、牧の消滅の中から誕生した牧村の母体は、上代から古代に至るこの地域で生まれ、小集落が次第に成長してきた

のを防ぐために堀をめぐらしたこともわかります。こうした豊満牧も、やがて建武の内乱期になくなつたようである。古文書からも姿を消しました。かわつて、跡地を惣領にして成立したと考えられるのが、牧村です。この村の初見は室町期の

路・牧落・桜村ト相分レ候得共、古代ハ總シテ四ヶ村牧村ト相唱候」とありますから、初めに記した四地区は、昔の牧村の地であることがわかります。江戸時代の四ヶ村が時に「牧之庄」とも呼んだのは、地域のこうした歴史を背景にしていたのです。

いわゆる「自然村落」でありましょう。鎌倉時代の元徳元年(一一三九)の古文書に見える「平尾」はその一つです。当時「報恩寺」という寺院も知られるなど、村の形が定まっていたようです。今では寺の名前すら残っていませんが、奇しくも昔の寺

したがって、違ひ上代や古代はさておき中世も鎌倉・室町期になると、地域の様相が一定しました。地区を取りまく社会的、政治的な条件に対応して、牧村が生まれ、瀬川宿が成長してきたのです。

山が「報恩寺松尾山」の名で残っています。それにしても、古代国家によって設けられた豊満牧がなくなり、かわつて登場した牧村は、在地の人びとを主体にする村落でありました。箕面地区にも中世という新時代が到来し、新しい村づくりが始まったのです。こうした新しい息吹きは、街道筋の瀬川でも知られます。この地は、建武の動乱時に南北両朝勢力の合戦場になつたことでも知られていますが、早くから山陽道筋の宿場として発展していたようです。宝治二年(一一四八)の勝尾寺般若会るとき舞われた舞人の一人が、瀬川出身でもありました。中世芸能者の生地が瀬川であることは、この地が非農村でもあった一面を示してくれています。